（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	Nguyen Thi Le
論文題目	Childbirth among Ethnic Minority People in Northern Vietnam: Choice and Agency in the Hmong Case （北部ベトナム少数民族における出産 ―モンの事例にみる選択と行為主体性―）		

（論文内容の要旨）

本論文は、ベトナム北部山地に居住する少数民族モンの出産に関する実践に着目し、彼ら／彼女らが一定の政治・社会的条件のもとで、如何にそして何故、出産をめぐる選択をするのかを二つの村における民族誌的調査に基づいて分析する。その結果、現代医療と民俗医療の交差する文脈において、モンの人々はその両方を、柔軟かつ実践的に取捨選択しながら融合的に利用していることを明らかにする。出産時のモン女性の医療選択は動態的であり、距離・コスト・医療の質や文化的実践など様々な要素の複合的な相互作用のなかでバランスをとり、究極の目的、すなわち母子の安全を保障するための最善の選択を行っている。民族誌記述に基づく分析によって、モンの人々がこれまでいわれてきたように「文化的要因」や「構造的暴力」の中で出産時の選択をするのではなく、平地社会との不平等な構造にあって行為主体性を行使していることを示す。

論文は、7章から成る。第1章では研究の背景、問い、先行研究、理論的枠組と方法を示す。理論的には、エスニシティと民族間関係、医療と出産をめぐる選択、そして行為主体性の三つの領域を相関させた枠組を提示する。第2章と第3章は、北部山地における出産の実践に影響を及ぼすグローバルな動きやベトナム社会とその政治および少数民族を含む歴史というマクロな文脈を明らかにする。第2章では、ベトナムの民族構成と、植民地期以降の政府が少数民族分類により山地少数民族に対して差異のレジームを形成しつつ統治してきた歴史を概観し、モンの歴史、人口や分布、呼称や下位分類などを紹介する。そして、ベトナムにおいて国家開発過程に少数民族を統合する「文明化プロジェクト」の中でも後進的とされるモンをめぐる言説について紹介し、民族ステレオタイプとともに生じた差別の過程を明らかにし、それが少数民族の出産時の選択に影響を及ぼしていることを論じる。第3章では、ベトナム政府が少数民族地域の出産実践にどのように関与してきたかを検証する。少数民族地域のリプロダクティブ・ヘルスにおける格差、その中でも特筆されるモンを筆頭に、北部山地では例外的に出産における医療保健施設の利用率の低いことを指摘する。そして2000年以降進められてきた諸政策では、近代的な保健医療施設での出産や、少数民族地域における産婆教育プログラムが進められたこと、にもかかわらず設備や人員が整わず、効果が上がらないこと、そしてそのことが少数民族の伝統や慣習、後進性や非合理性によって理由づけられてきたことを論じる。

第4章では、調査対象の二つの村とそこでのモンの生活世界が描かれる。そして、モン

の土地と人々が、マクロな文脈の変動のもとで伝統と現代の間を揺れ動く様子によって、モン社会を動態的に描く。伝統的なモンの出産実践の社会的な文脈のみならず、多元的医療状況にあってモンの村人が選択をおこなう理由を考察するための背景を検証する。

第5章と6章は、実際のモンの出産について論じる。第5章では、モンの自宅出産の事例が紹介され、出産や健康全般をめぐる民俗医療やその専門家を紹介する。そうした民俗医療は、公的医療制度の導入後に数十年をかけて変化してきたとも考えられるが、ここではモンの人々の民俗医療による出産を理解する上で豊かに文化・社会的文脈を再構成し民族誌的に描いている。第6章では、二つの村のモンの産前産後を含む出産における実践を200名のモン女性へのインタビュー資料に基づく統計分析と、長期滞在調査による参与観察から得たデータに基づいて分析する。それにより彼女らが保健施設での出産と自宅出産の間でどのように選択を行うか、その要因を明らかにする。

第7章は、これまでの各章のデータと分析に基づいて、議論と結論を提示する。自宅出産は奨励されていないとはいえ、山地の保健医療施設における近代医療が必ずしも十全な形で提供されていないなかで、近代医療と民俗医療の選択を迫られるモンによる柔軟な選択のありようを、行為主体性と序章で示したその類型によって説明する。構造的な諸要因によって必ずしも意に沿った選択ができるわけではないことを示したうえで、従来の文化や伝統によって彼等の近代医療受容の低さを説明する言説に反論し、むしろ医療システムの混交（Syncretism）として説明する。最後に、近代医療におけるケアのみをあるべき出産の姿とする論調に対し、モンの出産から学ぶべき点を示唆している。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

リプロダクティブ・ヘルスをめぐる近年の人文社会系の研究は、進展する生殖医療技術に伴って不妊治療と宗教や政治の関わる倫理的問題などに取り組んでいる。そうした中で、妊娠・出産の医療化は既に過去のこととされがちであるが、世界の多くの地域では、特に周縁化された少数者を中心に、近代医療へのアクセスや可能な選択に関して問題は少なからず残されている。本論文が対象とするベトナムの山地居住の少数民族もまさにそのような事例であるが、多くの問題が残されているにも関わらず、これまで実態調査がなされることなく、マジョリティによる言説のみが流布されてきた。本論文は、ベトナム山地における一年余りに及ぶ調査によって収集したデータを用いて、まさにこうした問題と正面から取り組んでいる。

ベトナム西北高地山間部少数民族地域は、外国人研究者にとってほとんど調査不可能な地域である一方、ベトナム人研究者が長期滞在調査を実施する例はこれまでほとんどなかった。グエン・ティ・レ氏はマジョリティである平地キン（ベト）出身であるが、この稀な調査に果敢に挑戦した。調査地で被差別意識の強い少数民族に受け入れられたことは、出産現場に立ち会うことができたことや良質なデータを収集できたことによく示されている。本論文は、二つの村の200人の女性へのインタビュー調査による分析と詳細な民族誌記述をもとに、行政のもたらす制度とその実態、および平地キンから最も後進的と見なされがちな少数民族モンの出産をめぐる選択の相関関係をモデル化して議論したオリジナリティの高い成果である。

本論文の学術的貢献としては以下の点が挙げられる。

第一に、北部ベトナムで中国国境と接しモンの人口が集中している郡内で、市場へのアクセスの良い村と市場から遠い村との二村を選んで長期滞在調査を実施した成果として、ベトナム山地モン社会の優れた民族誌になっている。特に民俗医療や身体と健康に関わる認識や儀礼実践とともに、妊娠から産後までを社会文化的文脈の中で描くとともに、出産経験のある200人の女性たちへのインタビューから自宅出産と施設分娩の選択の様相を明らかにしており、量と質両面で充実したデータを提示している。

第二に、ベトナムの政策や近代医療の変遷の文脈を踏まえつつも、あくまでもモンの視点を重視したことから、彼らの出産をめぐる選択が決して個々人によるものではなく、家族・親族や近隣といった社会関係に埋め込まれた形での選択であることをインタビュー結果の分析と事例報告によって明らかにしている。モンの出産を女性の出来事として語る傾向のあったこれまでのアメリカのモン難民の研究や、夫に従属する妻としてモンの女性を描きがちであったタイにおける民族誌等とは異なる視点で夫の役割と妻の立場を描き直している。それは、モンの家族・親族理解にも重要な貢献であると同時に、出産とその選択の分析をめぐって社会関係がいかに重要であるかという指摘にも

なっている。

第三に、序論においてグローバルな出産の医療化の流れ、民族間関係、医療における選択の在り方について、エージェンシー論に基づく相互関係の理論的なモデル化を試みており、最終章でデータの分析結果についてこのモデルを用いて説明している。このモデルにどれほど汎用性があるかは、本論のみでは定かではないとしても、他地域での比較を可能にする仮説を提示したという意味で高く評価できる。

第四に、本論は現状に対する提言としての意義をもつ。出産の医療化はもはやキンにおいては当然の前提である一方、政府は山地の医療設備の利用度の低さを山地の人々の後進性や伝統維持の姿勢によって説明する。本論はこうした既存言説に対して、モンの人々は安全が脅かされた場合に、良質な医療にアクセスできればそれを選ぶこと、現状ではアクセスの悪さとともに山地の保健医療施設における人材確保がされていないことこそが問題であると指摘する。それは政策に対する提言でもあり、また同時に低地キン出身者として、キンによる蔑視の最も著しいモンの視点に寄り添いその実態を報告することで、ベトナム社会に対して提言する内容ともなっている。

本論文は、詳細なデータとそれに基づく考察、多様な要素を包含して分析する上でのモデルを構築するなど、学術的な貢献として高く評価できる。また、調査者の立ち位置や視点を随所に記し、読む者を引き込み説得する印象深い筆致による好論文である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。